

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0991000043		
法人名	有限会社ワイズプランニング		
事業所名	グループホームこころ黒羽		
所在地	栃木県大田原市大豆田468-4		
自己評価作成日	令和元年11月30日	評価結果市町村受理日	令和2年3月12日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/09/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人アスク
所在地	栃木県那須塩原市松浦町118-189
訪問調査日	令和1年12月11日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当こころ黒羽は八溝山系の豊かな自然に囲まれ、江戸時代には松尾芭蕉が奥の細道の旅中14日間もの間滞在し、多くの句を残し「芭蕉の里」として有名な黒羽の地に平成18年6月に開設。以来地域の多くの方々に支えられ、14年目を迎えることができました。開設以来、地域の方々とも積極的に交流を図り、利用者が、より過ごしやすく充実した日々を送れるよう努めてまいりました。今後も地域密着型事業所としての具体的な役割を職員一人一人が理解し、常に模索し続け、地域から必要とされる施設を目指し、邁進していく所存であります。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

グループホームこころ黒羽は、職員が笑顔でいることが、利用者の笑顔を作ることに繋がると考え、笑顔での支援を大切にしている。事業所は黒羽地区の中心地にあり、地元の利用者が多いため、地域での催し物や買い物に行く顔なじみの人に出会える立地である。事業所が主催する夏祭りやお茶会では地元のボランティアが余興などで参加している。また、いざという時には自動火災通報装置に登録されている地域住民に駆けつけてもらえる協力関係にあり、地元へ根ざした事業所と言える。運営推進会議では運営状況の報告後毎回テーマを決めて話し合い、それらの会議録を家族に送っている。話し合うテーマは高齢者を取り巻く問題であったり、施設や地域の課題であったり、内容は多岐にわたっている。会議では自治会長や民生委員から地域の情報が提供されており、活発な意見交換が行われている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
I. 理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	地域密着型サービスの意義を踏まえた上で職員たちがみんなで作り上げた職場理念をホールと事務所に掲示し、毎朝唱和しており、実践につなげている。	管理者は、夜勤にも入ることですべての時間帯の職員の大変さと実践の実態を確認し、職員との対話を心がけ、「利用者の立場に立った人権」を守ることを目指している。事業所理念の一つである「笑顔で笑顔を創ります」では、職員が笑顔でいることが、利用者の笑顔を創ることに繋がると考え、笑顔での支援を大切にしている。そのために、管理者は職員に掛かるストレスや気持ちを受けとめ、職員の権利を守ることに努めている。	事業所独自の理念を作った当時の職員が少なくなっているため、掲示し唱和するだけでなく、異動等で着任した職員や新しく入った職員に改めて事業所独自の理念が実践の基本であることを理解しているか確認する取組を期待する。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	開設から13年経ち、地元の方々にも随分受け入れられてきていると実感している。地元自治会長や民生委員の方々の協力により、川西小学校の運動会には2年連続でご招待いただいたり、地域のイベントや清掃活動、廃品回収などにも積極的に参加している。	運営推進会議のメンバーでもある自治会長や民生委員は、様々な情報を提供してくれる心強い協力者である。また、事業所が主催する夏祭りやお茶会では地元のボランティアが余興などで参加している。事業所は黒羽地区の中心地にあり、地元の利用者が多いため、地域での催し物や買い物に行く顔なじみの人に会える立地である。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地元ボランティアの方々や、地元小学校、中学校の生徒の受け入れは積極的に行っており、認知症の理解、支援方法を地域の方へ発信する良い機会となっている。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	通算81回を数える運営推進会議には毎回多くの方に参加いただいている。地元自治会長、民生委員の方々との情報交換の場にも役立っており、そこで出た意見を積極的に取り入れ、サービス向上に活かしている。	運営推進会議では運営状況の報告後に毎回テーマを決めて話し合い、それらの会議録を家族に送っている。話し合うテーマは高齢者を取り巻く問題であったり、施設や地域の課題であったり、内容は多岐にわたっている。地域の情報も自治会長や民生委員から提供されており、活発な意見交換が行われている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは頃頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	日頃より、市の担当窓口足運び、ことあるたびに担当者に報告や相談をし、協力関係を築くよう取り組んでいる。	毎月の報告事項や生活保護関係の報告に市の担当課を訪問する機会が日常の取組を伝える機会となっている。また運営推進会議に出席する市の担当者に事業所の実情を伝え、情報提供やアドバイスを受けている。		

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、年に2回身体拘束についての勉強会を開催し、玄関施錠を含む身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	身体拘束をしないケアを徹底し、利用者が外に出た時には職員がさりげなくついて行き、玄関の施錠はせず行動の自由を確保している。また、威圧的な態度や抑制するような言葉に対しても管理者等がその都度注意し、ミーティングで確認している。管理者は、全職員が参加する定例のグループホーム会議等で、職員自身が感情をコントロールするすべを持ってもらいたいと伝えている。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	管理者やケアマネージャーは、常に利用者とは会話する機会をつくり、施設での生活について、不満や不安なことがないか聞き出し、サービス向上につなげていると同時に虐待などが無いか注意を払っている。			
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度についての勉強会を実施したり、社内勉強会を行い制度の理解に努めている。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の締結、解約又は改定の際は利用者または家族に十分な時間をとっていただき、管理者、ケアマネージャー、看護師等が立ち合い具体的な話を交えながら内容の理解・納得を図っている。			
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者や家族が気軽に意見や要望が述べられるような雰囲気作りを心掛けている。意見、不満、苦情をいち早く察知するアンテナの役目の介護職員であるので、先んじて職員が聞く耳を持つようにしている。また、それらを施設運営に反映させている。また、家族には公的相談窓口を紹介するなどして客観的に判断できる機会を提案している。	施設としては利用者や家族の声を聞こうとする努力はしているが、運営に関して具体的に意見や要望が出されることはほとんど無い。	家族には言いにくさや遠慮があることをふまえて、意見・要望・苦情が出せるような配慮・工夫をしているか再度検証することが期待される。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に一度社内全体会議を行い、全職員からの要望や提案を聞き、施設運営に反映させる機会としている。また、全体会議の他に、月に一度グループホーム会議を行い、より具体的な意見や提案を聴く機会を設け、運営に反映させている。	利用者一人ひとりに対する対応の仕方を話し合う中で、事業所全体で工夫することや職員配置などが提案され、具体的に改善に結びつけている。例えば、水分補給を確実に把握するために、目盛りのついた機能的なティーカップを導入したり、安全の配慮が必要な利用者には入浴介助を一人から二人に変更したりして改善を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人役員が常に管理者や職員の勤務状況を把握し、就業環境の整備に努めている。給与面では個別の人事考課表により施設長、または管理者が中心に職員の査定を行い、より実態に即した評価が出来るようにしている。また、その査定結果を踏まえた個人面談を行い、やる気を引き出せるよう努めている。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	施設内外の研修は全体に対するものと個別に対するものと分けて実施している。社内研修については全職員を対象として外部講師を呼び、介護技術や知識の向上につなげている。また、個別に対するものとしては、随時代表者または管理者が適任者を選び、外部研修に参加させている。また、資格取得についてはキャリアアップ助成金制度を活用するなど法人としても全面的にバックアップしている。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	大田原市介護サービス事業者連絡協議会の部会ごとに毎年実施している勉強会等には積極的に職員を参加させ、他事業所との交流を図っている。また、当法人代表者も居宅サービス部会長として市内他事業所と積極的に交流を深め、相互の発展に努めている。			
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービスを導入する初期において、信頼関係の構築は大変重要であると捉えている。ご本人が不安に思っていることや本音の部分をも十分時間をかけて傾聴するよう心掛けている。会話により利用者をよく知ることから始め、生活環境、希望するサービス内容、過去のサービス利用状況などを総合的に的確に確認するようにしている。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	先ずはご家族の思いと希望、そして本音を言っただけのよう十分時間をかけて傾聴するようにしている。ご家族と利用者との関係は表裏一体であるから、サービスの内容と合わせて経済的な不安感も軽減できるよう具体的にパンフレットや試算表で示し、解り易く話をするように心がけており、できるだけ早いうちに信頼関係ができるよう努力をしている。			

自己	外部	項目	自己評価	
			実践状況	実践状況
			次のステップに向けて期待したい内容	
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	サービスの導入の段階で、過去のサービス利用状況の有無や現在の生活状況、介護状況などを総合的にアセスメントして、本人と家族が今必要としている支援がどのようなものかを見極めるようにしている。同時に他のサービスも視野に入れた中で介護計画が策定できるよう努力している。また、初期の段階では必要とされる支援の内容を見極めるため、特に傾聴を心がけている。	
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員が利用者の介護を通し、喜怒哀楽を共にし、その中から学び、互いに喜びと感謝の念が育つことを目標にし、暮らしを共にする者同士の関係を築くようにしている。これは当施設の経営理念にある重要事項である。	
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員は常に家族の立場を尊重しながらも、絆が薄れないよう本人との接点を持てる場の構築に努めている。また、家族の心のありようや変化などを読み取れるように努力することにより、相互間信頼が生まれ、本人や家族にとって安心して生活できる環境の構築につながっていくと考えている。	
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ご本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が継続していけるよう支援に努めている。可能な限り、行きつけのお店や理容室を利用できるよう支援している。面会者には家族や兄弟はもちろんのこと、馴染みの生活環境を知る人、古い友人、ご近所の方などがおり、来訪者には一度ならず何度もたずねてきていただけるようお願いをしている。	入所時のアセスメントや入所後に家族から聞き取ったことを関係性の継続の支援に役立てている。家族以外の面会もあり、事業所の近くに自宅がある人は馴染みのお店に買い物に行き、知った道を散歩するなど今までの関係性が続いている。ある利用者は自宅の畑にジャガイモを植えに行くなどで今までの生活の一部を継続している。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	まずは利用者一人ひとりの性格、趣味等、昔の生活環境をできるだけ詳しく具体的に把握するよう努力している。地域密着型施設の特長ともいえるが利用者同士が以前から知り合い同士や友達関係であったり、互いに関わり合ったり、支えあったりする環境にあったというケースも多いからである。できるだけ多くの情報を得て、利用者同士が様々な人間関係を尊重しつつ、それを大事に良好な関わり合いを保ち続けられるよう支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	家族や本人の希望により契約終了後であっても必要に応じて関わっていくようにしている。また、他の施設等に移動される場合はよりよい介護サービスが受けられるバックアップを心がけている。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者に関する情報の共有に努め、利用者の状況、状態の変化には随時カンファレンスを行っている。また、本人からの把握が困難な際は家族から出来る限りの情報を得ながら、慎重に本人本位のケアマネジメントを行っている。	ケアマネジャーがアセスメントを行いその情報を職員と共有し、職員が把握した利用者の思いや意向と併せて、本人の希望・意向を把握している。利用者から毎日散歩をしたい、牛乳を買いに行きたい、図書館にCDを借りに行きたいなど具体的に希望が出されることもある。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	一人ひとりの生活の歴史や馴染みの暮らし方、生活環境を知る上で日常会話は有効な手段である。話題の幅を広げながら、傾聴に努め、本人、家族と情報交換を絶やさず行うことによりこれまでのサービスの経過などの把握と同時にアセスメントの充実を図っている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、趣味趣向や得意とするものなど、有する力等の現状の把握を客観的かつ総合的に把握するよう努力している。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを介護計画に反映させるよう努めている。また、一利用者に対し職員一人の担当者制を取り入れ、日常生活における状況や状態の変化などの情報収集に努め、体調管理の面では2名の看護職員と常に話し合い、多面的に関わりを持つことで得た課題を介護計画作成に反映している。	現在はアセスメントから計画作成、モニタリングまでケアマネジャーが単独で行っている状態であり、サービス担当者会議などチームで協議する場が活かされていない。目下、利用者一人ひとりの日常における状態・情報の把握を担当制で行うよう見直し、アセスメントやモニタリングも新たな手法へ移行中である。	介護計画が管理マネジメントサイクルで確実に課題が改善されるように、計画実施後のモニタリングや再アセスメント、計画見直し、サービス担当者会議のあり方を職員で協議し、共有することが期待される。特に職員や家族、主治医など関係者の情報や意見、アイデアを反映した介護計画となるように、チームで作成するための工夫を期待する。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ADLや排泄のみならず日々の変化に気を配るようになっている。変化などは介護記録に記入し、情報伝達が途切れないようにしている。通常の介護記録のほかに個別に必要なチェック表を作成することもあり、経緯や結果は介護計画の見直しに活用している。			

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	柔軟性に富んだ支援は当施設の得意とする部分でもあるので、今後も色々なニーズに応えられるよう多機能化を図っていききたい。また、利用者本人や家族の希望をできるだけ取り入れるように努力している。			
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	民生委員や各種ボランティアグループ、警察署、消防署、文化・教育機関、商店会、地域住民の方々などの存在を地域資源として捉え、地域密着型介護施設として利用者がより安全で豊かな生活を楽しむことができるようにその資源をおおいに活用させていただいている。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診は本人や家族の希望するかかりつけ医を基本としている。定期受診等は家族または親族に対応をお願いしているが、家族対応が困難な場合は施設側で対応している。また、場合によっては本人、家族、施設と三者でかかりつけ医を受診し、情報共有を図りながらかかりつけ医との関係構築に努めている。あわせて、緊急時や往診が必要な場合でかかりつけ医が対応できない場合には、協力医の存在を前もってご家族に伝えている。	本人や家族の希望により、利用者はこれまで通りの主治医に診てもらっている。受診は基本的に家族が対応しているが、必要なら事業所のケアマネジャーか看護師も同行している。家族の対応が困難な場合は職員が付き添い、結果については当日家族に電話で連絡している。また、主治医を事業所の近隣にある協力医療機関に変更することを希望する家族もいる。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職員は利用者との日常の関わりの中で得た情報等を適切に職場内の看護職員に伝え、相談している。また、2名の非常勤専従看護職員をシフトにより出来る限り毎日看護職員がいるよう配置し、いつでも相談できる環境をつくっている。看護職員はケアマネジャーや管理者と相談しながら適切な対応を決定するようにしている。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者の入退院の際、または入院中も随時面会に訪問し、本人のメンタル面のサポートをしつつ、病状の把握、及び病院関係者や家族との情報交換に努め、利用者が安心して治療できるよう、また、早期退院できるよう病院関係者との関係づくりをおこなっている。			

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した利用者あるいは終末期のあり方については出来るだけ早い段階で本人や家族等と話し合っている。また、医療が必要な場合は事業所でできることとできないことを十分に理解していただけるまで説明をし、本人と家族、かかりつけ医、事業所、場合によっては地域の関係者とのチーム支援を念頭に最良の方法が選択できるよう努めている。	事業所として重度化や終末期に向けた具体的な指針を作るまでには至っていないが、主治医の協力が得られれば、職員として看護師がいるので、可能な限り看取りにも対応している。利用者の状況に応じて家族に事前に説明し、話し合うと同時に、職員間や関係者と看取りに関して協議している。実際に看取りを行い、経験した職員も在職している。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変や事故発生時の応急手当や初期対応についての訓練を担当看護師が講師となり、定期不定期にかかわらず継続して行っている。実践力も徐々についてきている。また、事故発生時における協力医や担当医との連携はうまく図れている。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	常々、警察はもとより近所の方々への被災時における協力依頼をしており、安全対策について利用者の家族とともに学ぶ機会を複数回設けている。消防署の協力と指導のもとに毎年2回消防訓練を実施しており、地区の消防団や近所の方々の協力も得られるようになった。	昼間および夜間両方を想定した避難訓練を毎年実施して、より安全に避難できる方法を具体的に検証している。火災の場合と地震の場合で扉の開閉方法がどのように異なるのかも職員間で確認している。運営推進会議等で民生委員から安全な避難場所のアドバイスを得ている。いざという時には自動火災通報装置に登録されている地域住民が駆けつけてくれる協力関係ができています。		
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりに対して思いやりと人格を尊重する言葉掛けや対応を心がけている。個々のプライドやプライバシーを尊重することは経営理念、職場理念にも繋がる大切なことと捉えており、全職員が理解するよう勉強会も実施している。	「職員の笑顔で利用者の笑顔を引き出す」ことを理念としている事業所としては、職員の権利を守ることで利用者へのより良きケアに繋がりたいと考えている。管理者は、本人の立場になって「人権を守る」という意識を持って一人ひとりの利用者とかかわるよう、随時、職員に指導している。利用者を明るく励ましたくて言葉遣いがつい親しげになることもあり得るので、丁寧な言葉遣いを常に心がけている。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	一人ひとりの思いや希望についてその人なりの力に合わせた表現が気軽にできるように支援したり、自分自身が決定し、納得しながら生活できるように出来るだけの支援をしている。また、職員は利用者が本当に言いたいことや希望が何なのかを理解できるよう傾聴を心がけている。			

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりがその日をどのように過ごしたいのか、言葉にできない利用者については心の声を聴くよう努め、それぞれのペースや希望に添った過ごし方をしていただけるように心掛けている。ただし、本人のためになるかどうかの適切な判断は必要であり、場合によっては複数の職員で検討が必要なケースもあり、状況に応じた支援をしている。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	ご利用者の身だしなみやおしゃれに関しては出来る限り本人の希望を優先して自己決定できるように支援している。着衣の選択は出来るだけ本人に決めていただく。また、理容や美容に関しては、本人、家族と相談の上、可能であればかかりつけの店の利用を基本にしているが、不可能な場合は月1程度の出張サービスを利用していただいている。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	昼食については専従調理員が対応するが、朝夕は利用者と職員と一緒に準備・片付けを行っている。また、月一回程度実施している外食会以外にも、個々の好みをリサーチし、焼肉パーティを実施したり、テイクアウトの生寿司を提供したりと外出が難しい利用者にとっても食事が楽しみになるよう工夫している。	普段のケアの中で聞き取った利用者の好みを把握して、できるだけ献立に生かすようにしている。昼食は併設の小規模多機能型居宅介護施設の厨房で専従調理員が調理し、両施設の中心に位置する広いホールで両利用者が食事をしている。朝夕は業者から届けられた食材を利用してグループホームのキッチンで職員が準備し、利用者はできる範囲で片付けを一緒にしている。利用者は外食会を楽しみにしているが、キッチンカーで来てくれる移動ラーメンを特に心待ちにしている。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一日を通して食事摂取量と水分摂取量のチェックを行っている。水分については摂取量が目でわかるコップを使用し、制限がない限り1000CCを最低基準としている。提供する食事については栄養バランスや個々の体調に合わせたものになるよう考慮している。また、体調や状態の変化に応じて随時内容をアレンジしながら1ヶ月の献立を作成し、日々の微調整をその都度行なっている。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔内に残渣物を残さず清潔を保てるように、毎食後、必ず口腔ケアの支援をしている。一人ひとり口腔状態やできる部分を考慮し、個別に対応方法をアレンジして支援している。			

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	24時間の排泄チェック表を使用し、利用者ひとりひとりの排泄パターンや習慣を理解し、自立に向けた支援をしている。個々の排泄パターンから声かけ誘導の時間とタイミングを計り声かけ誘導したり、オムツ使用の方についてもできるだけトイレでの排泄が出来るよう支援している。	日中はほとんどの利用者がリハビリパンツか布パンツで過ごしている。タイミングを見計らい声がけをしたり、サインに気づいたときにトイレに誘導したり、できるだけ自立して排泄できるように支援している。サインを出すことが難しい利用者については、時間でトイレに誘導して、座ってもらうようにしている。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食物繊維が多い食材を豊富に取り入れたバランスの良い食事と適切な無理のない体操や自力歩行を継続する働きかけを行い、便秘体質が改善されるような対策をしている。また、便秘の原因を理解し、便秘の予防や個々の症状に応じたより有効な便秘対策を心がけている。			
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	個々の体調や生活習慣、希望に合わせて楽しんで入浴できるよう支援している。場合によって入浴できないときは足浴やシャワー浴などを施行したり、時間帯を調整し、午後浴、就寝前の夜間浴の実施など、できるだけ柔軟な対応を心がけている。	職員の勤務体制により、基本的に週に2回から3回入浴をしている。職員の対応が可能な場合は、入浴時間についても早い時間帯から遅い時間帯まで、できるだけ利用者の希望に応じている。特に入浴が好きな利用者は週4回入浴している。入浴が苦手な利用者については、利用者が安心して入浴できる職員が担当するなどの配慮をしている。		
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの生活習慣や状況に応じて、できるだけ希望に沿った対応を心がけている。また、夜勤者は利用者の安眠度のチェックを欠かさないようにしている。ほとんど睡眠をとらず、影響が懸念される場合は医療機関の受診も視野にいれ、質の良い睡眠をとれるよう支援している。			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方された薬の説明書等は服薬一覧表に綴じ込み、職員全員がいつでも見られるようホールに設置している。また、一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量についても全職員が理解できるよう努めている。症状の改善や変化については常に看護職員と介護職員、ケアマネージャーが情報共有し、随時家族や主治医と連携を図り、より現状に合わせた服薬支援が出来るよう支援している。			

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの生活歴を尊重し、できることによる楽しみや張り合いを得られるように工夫している。洋裁の仕事をしていた方には裁縫やアイロンがけを、菜園作りが得意な方には植え付け、追肥、草取り、収穫などの役割分担を、体を動かしたい方には散歩以外にも食器の配膳下膳や洗濯物を干したり畳んだり、テーブル拭きをお願いしたりと本人の望むことを取り入れ、気分転換を図っている。また、CDで好みの音楽を聴くことを習慣にしている方は定期的に図書館にお連れし、好みのCDの選択から返却までの全てをご自分でやっていただいている。			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	日用品や衣類の買い物などは本人をお連れし、希望にそって購入できるよう支援している。月一回の外食会には普段は行く機会の少ない飲食店で食事を楽しんでいる。また、毎月の行事や季節によりドライブなども行っている。体調や天候により外出出来ない場合は施設敷地内の庭先に出て花を眺めたり、近所の公園を散歩したり外の空気を吸えるよう支援している。家族や知人との外出や食事は奨励している。	スーパーやドラッグストアが事業所のすぐ近くにあるので、希望に沿って利用者本人と一緒に買い物に出掛けている。職員にゆとりのある日や、お天気がいい日など、臨機応変に事業所周辺を散歩している。敬老会にはとなりまちの馬頭まで利用者全員でドライブに出かけ、現地の食堂でそれぞれが好きなメニューを注文して食事を楽しんだ。希望を伝えることが困難であったり、部屋に閉じこもりがちな利用者も、外に出かけると表情が明るく変わるため、散歩やドライブに誘うようにしている。		
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お小遣いとして適当な額をお預かりし、事務所の金庫で保管管理している。利用者が買物を希望する時は職員が付き添い、品選び、支払い、受け取りを極力本人にさせていただき、金銭感覚を保持できるよう支援している。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族や知人への電話の希望がある場合は施設のものを使用していただいている。暑中見舞いや年賀状作成の支援、投函の支援を行なうこともあり、面会者や家族には手紙やハガキなどを書いていただけよう依頼することもある。			
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関や廊下など共用空間は明かりのとりにかた、心地よい温度や湿度の管理に工夫し、体感や視覚的に負担のかからないように配慮している。厨房での食事作りの際の香りや音は食欲をそそり、居心地をよくするツールのひとつと考えている。廊下や玄関には地元作家の版画や季節を感じられる花々を飾ったり、穏やかなやさしい空間作りに努めている。貼り絵などは利用者と一緒に作成し、作る楽しみと飾る楽しみが同時にできるように工夫している。	インフルエンザ等感染症予防の徹底のために、事業所の入り口には、手洗い、消毒、うがい、マスク着用の注意書きとともに消毒液等が用意されている。小規模多機能型居宅介護施設が併設されている建物の中心部分に、庭に面した広く明るいホールがあり、日中は両方の施設の利用者が一緒に過ごしていることから、とてもにぎやかである。廊下の壁には利用者の家族が撮った見事な自然の風景写真が飾られていて、四季折々の美しさを楽しむことができる。		

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	社交場でもあるホールは読書やゲームができるスペースになったり、食事やおやつを楽しむ場所となったり、畳の間はボランティアさんたちの舞台にも変化する。TPOに合わせホールのテーブル配置をアレンジし、プライベートの場所を確保することもある。ホールのソファは昼寝に格好の場所である。あらゆる場所が一人ひとりが思い思いの居心地のよい場所として活用できるよう努めている。通路や玄関には歩行の障害物にならないよう気を配りながら、ソファや椅子を配置し、サブリビングスペースをつくり出している。			
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自室の備品は、本人が使い慣れ親しんできた家具や調度品を活かして、居心地よく生活できるように本人や家族と相談しながらレイアウトを行っている。転倒など危険防止を優先する場合は、本人または家族に了解の上、使用する家具や寝具の種類を考慮して準備していただくこともある。また、限られたスペース内でのレイアウトであるので動線確保には気を配っている。	使い慣れたダンスやベッド、座りやすいソファなどが持ち込まれた部屋では、利用者がこれまでの生活とできるだけ変わりなく過ごせるよう配慮されている様子がうかがえた。ベッドの使用が困難な状況の利用者は、布団を室内に敷いて過ごしている。ぬいぐるみや昔懐かしい写真が飾られていて、それぞれ好みのものをおいて居心地よく過ごせるようにしている。		
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活を送れるように工夫している	建物内部は出来るだけ分かりやすいイラストや文字を使い、自室やトイレなどに自分で行けるよう配慮。また、義歯の洗浄、装着を含めた口腔ケアがご自分でできる方には洗面所に必要な物を準備、声掛けのみの支援を行い、一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして安全かつできるだけ自立した生活を送れるように工夫している。			